

<特集「他動性」>

ドイツ語における他動性 Transitivity in German

成田 節
Takashi Narita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 諸言語における「他動性」についての風間(2014)の総論, およびそこに提示されている日本語の例文をベースに, ドイツ語での状況を記述し, 若干のコメントをつける。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘transitivity’ (*Journal of the Institute of Language Research* 19, 2014, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer German data for the question of 20 phrases.

キーワード: 他動詞構文, 対格目的語, 前置詞句

Keywords: transitive construction, accusative object, prepositional phrase

本稿では, 諸言語における「他動性」についての風間(2014)の総論をベースに, そこに提示されている日本語の例文に対応するドイツ語の表現を例示し, 適宜コメントをつける。¹

1. 直接影響・変化

(1a) 彼はそのハエを殺した。

Er hat die Fliege getötet.
he has(AUX) the.F.SG.ACC fly(F):SG.ACC kill:PP²

(1b) 彼はその箱を壊した。

Er hat den Kasten kaputt gemacht.
he has(AUX) the.M.SG.ACC box(M):SG.ACC broken(ADJ) make:PP



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 例文の容認可能性判断に際しては東京外国語大学のクリストフ・ヘンドリクス氏にご協力いただいた。また, 匿名の査読者からは本稿の改善のための数多くの提案をいただいた。ここに記して感謝します。

² グロスの付け方は概ね *The Leipzig Glossing Rules* (last change: May 31, 2015)に従った。用いた略号の一覧は本文の末尾に挙げておく。なお煩雑さを避けるために, 原則として形態素への分節は明記しない。また, 人称代名詞の場合, 主格のNOMは省略する(例えば he は he.NOM の略記)。また本稿で頻出する haben (have) と sein (be) の現在形は英語の対応形を挙げ, 時制及び人称と数の表示は省略する。例えば完了の助動詞 hat のグロスは has(AUX)としたが, これは have(AUX):PRS.3SG.の略記である。

(1c) 彼はそのスープを温めた。

Er hat die Suppe auf-gewärmt.
he has(AUX) the.F.SG.ACC soup(F):SG.ACC up-warm:PP

(1d) 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。

*Er hat die Fliege getötet, aber sie ist nicht gestorben.
he has(AUX) the.F.SG.ACC fly(F):SG.ACC kill:PP but she is(AUX) not die:PP

「直接影響・変化」は〔主格主語—対格目的語〕という格枠（以下、他動詞構造と呼ぶ。また主格主語は主語と略記する。）で示される。なお (1b) では kaputt machen 「壊れた+…にする」という複合述語が用いられているが、zerbrechen 「破壊する」なども可能である。なお (1a) の töten 「殺す」も形容詞 tot 「死んだ」からの、(1c) の aufwärmen も形容詞 warm 「暖かい」からの派生動詞であり、(1b) の kaputt machen と同様に「形容詞の状態にする」という意味構造の動詞である。また、die Fliege töten は「ハエが死ぬ」ことを含意するので、当然のことながら (1d) は容認されない。versuchen 「しようとする」と zu 不定詞の組み合わせで「殺そうとする」などとしないと「...が、死ななかった。」を繋げることはできない。

2. 直接影響・無変化

(2a) 彼はそのボールを蹴った。

Er hat den Ball getreten.
he has(AUX) the.M.SG.ACC ball(M):SG.ACC kick:PP

(2b) 彼女は彼の足を蹴った。

Sie hat ihm/ihn an=s Bein getreten.
she has(AUX) he.DAT/he.ACC at=the.N.SG.ACC leg(N):SG.ACC kick:PP

(2c) 彼はその人にぶつかった。(±意図性)

Er ist gegen den Mann gestoßen.
he is(AUX) against the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC bump:PP

「直接影響・無変化」には他動詞構造あるいは〔主語—前置詞句〕という格枠が用いられる。対象の状態変化は生じないとしても、(2a) の「ボールを蹴る」のように位置変化が生じる場合は対格目的語が用いられる。³ 他方「足を蹴る」のように「足」に位置変化が生じない場合は方向を表す前置詞句が用いられる。この場合「彼の」は与格 ihm 「彼に」あるいは対格 ihn 「彼を」で表される。(2c) 「その人にぶつかった」もぶつかることにより対象に物理的には多少の動きが生じるかもしれないが、表現自体は「ぶつかることで位置変化を引き起こす」という意味ではないので「その人に」は前置詞句で表される。なお (2c) はぶつかる意図の有

³ インフォーマントによれば「ボールを蹴る」に用いる動詞は schießen (シュートする) の方が普通だと感じられるとのことだが、コーパスでは treten もごく普通に用いられている。また Freistoß (フリーキック), Anstoß (キックオフ), Abstoß (ゴールキック) にも見られるように stoßen 用いられる。もっとも Langenscheidt (2003) では Anstoß を (im Fußball) der erste Schuss, mit dem eine Halbzeit eröffnet wird ((サッカーで) 前半/後半を始める最初のキック) と schießen からの派生名詞 Schuss を用いて言い換えているように、確かに schießen は「シュートする」だけでなく、「蹴る」の意味でも用いられているようだ。

無に関わらず用いられる。

また、ドイツ語には接頭辞（いわゆる非分離前綴）や不変化詞（いわゆる分離前綴）を用いた複合的な動詞が数多いが、そのような動詞においては基盤動詞とは異なる格枠で用いられるものも多く、「彼はその人にぶつかった」を他動詞構造で表すこともできる。

(2c') 彼はその人にぶつかった。(±意図性)

Er hat den Mann an-gestoßen.
 he has(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC on-bump:PP

anstoßen には「人を小突く」という意味もあるが、*stößt du einen Nachbar beim Aufstehen ein wenig an und entschuldigst dich* (DWDS)⁴「君は立ち上がる際に隣の人にちょっとぶつかって謝る」など明らかに「人にぶつかる」という意味で用いられている事例もある。また、同じ *stoßen* でも方向を表す語句と結びついて、「ぶつかって/突いて～に動かす」という意味の表現もある。この場合「ぶつかる/突く対象」は対格になる。

(2c'') 彼はその人を水の中に突き落とした。

Er hat den Mann in=s Wasser gestoßen.
 he has(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC in=the.N.SG.ACC water(N):SG.ACC bump:PP

3. 知覚

(3a) あそこに人が数人見える。

Ich sehe dort einige Leute.
 I see.PRS:1SG there some:ACC people:ACC

(3b) 彼はその家を見た。(知覚した)

Er hat das Haus gesehen.
 he has(AUX) the.N.SG.ACC house(N):SG.ACC see:PP

(3b') 彼はその家を見た。(目を向けた)

Er hat auf das Haus gesehen.
 he has(AUX) at the.N.SG.ACC house(N):SG.ACC look:PP

(3c) 誰かが叫んだのが聞こえた。

Ich habe gehört, dass jemand geschrien hat.
 I have(AUX) hear:PP that(COMP) someone:NOM scream:PP has(AUX)

(3c') 誰かが叫んでいるのが聞こえた。

Ich habe gehört, wie jemand geschrien hat.
 I have(AUX) hear:PP as(COMP) someone:NOM scream:PP has(AUX)

⁴ 本稿では適宜 *Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache* (DWDS) のサイト (<https://www.dwds.de/>) を利用して事例を提示する。その場合事例の後ろに (DWDS) と記す。

(3c'') 誰かが叫んでいるのが聞こえた。

Ich habe jemanden schreien gehört/hören.
I have(AUX) someone:ACC scream:INF hear:PP/hear:INF

(3d) 彼はその物音を聞いた。(知覚した)

Er hat das Geräusch gehört.
he has(AUX) the.N.SG.ACC sound(N):SG.ACC hear.PP

(3d') 彼は鐘の音を聞いた。(耳を傾けた)

Er hat auf die Glocke gehört.
he has(AUX) to the.F.SG.ACC bell(F):SG.ACC listen.PP

「知覚」の「見る」については (3a) (3b) (3b') に見られるように、受動知覚 (風間 2014:45) すなわち知覚の成立を意味する「見える」は他動詞構文で、能動知覚 (風間 2014:45) すなわち知覚成立の前段階を意味する「目を向ける」は [主語-前置詞句 (方向)] で表される。この点は英語の see と look at と平行していると言える。しかし他動詞構文の sehen が常に受動知覚というわけではなく、「映画を見る」einen Film_{ACC} sehen や「芝居を見る」ein Theaterstück_{ACC} sehen のように意志的に「見る」という場合もある。もっともこの場合の sehen は視覚的知覚ではなく、内容把握に重点があるので、動詞の意味が違っても考えられる。さらに分離動詞 ansehen は常に対格目的語を取り、基本的には能動知覚 (den Mann_{ACC} ansehen 「その男を見つめる」、与格の再帰代名詞 sich を伴う sich_{DAT} das Haus_{ACC} ansehen 「その家を見る (吟味する)」) だが、受動知覚 (dem Mann_{DAT} die gute Laune_{ACC} ansehen 「その男の上機嫌を見て取る」) の用法もある。

「聞く」についても事情はだいたい同じである。(3d) は他動詞構文で受動知覚を表しているが、「対格目的語+hören」でも「ラジオを聞く」Radio_{ACC} hören や「講演を聞く」einen Vortrag_{ACC} hören のような (内容理解を伴う) 能動知覚がある。また (3d') のように「前置詞句 (方向) +hören」で能動知覚を表す用法もあり、これは sehen の (3b') と同様である。

(3c) の「誰かが叫んだのが聞こえた」は、用いる接続詞によって捉え方の違いが出る。Vater (1976: 219f.) によれば dass を用いる (3c) が「誰かが叫ぶ」という事態を「丸ごと」捉えるのに対して、wie を用いる (3c') では「誰かが叫ぶ」という事態の経過に目が向けられ、「叫ぶ」と「聞こえる」が同時並行的に (koextensiv) 捉えられるとのことである。日本語で表し分けるとすれば (3c) は「叫んだのが聞こえた」、(3c') は「叫んでいるのが聞こえた」とでもなるだろう。⁵ 後者の捉え方の場合は (3c'') のような AcI (< Accusativus cum Infinitivo; 不定詞付き対格) 構文も用いられる。なお、この構文では知覚動詞の過去分詞は (3c'') のように不定形と同形になることがある。

4. 発見・獲得・生産

(4a) 彼は (なくした) 鍵を見つけた。

Er hat den Schlüssel wieder gefunden.
he has(AUX) the.M.SG.ACC key(M):SG.ACC again find:PP

⁵ なお、(3c)は「誰かが叫んだと (いうことを) 聞いた。」という意味も表し得る。

(4b) 彼は椅子を作った。

Er hat einen Stuhl gemacht/gebastelt/gebaut.
he has(AUX) a:M.SG.ACC chair(M):SG.ACC make:PP/build:PP/build:PP

(4b') 彼は椅子を作っていた。(作成過程)

Er hat an einem Stuhl gebastelt/gebaut.
he has(AUX) PREP a:M.SG.DAT chair(M):SG.DAT build:PP/build:PP

「発見」は基本的には (4a) のように他動詞構文で表す。同じ構文で用いられる動詞は *auffinden* 「(行方不明になっていたものなどを) 見つけ出す」, *entdecken* 「発見する」など多数ある。なお「発見する」という状況は, *auf die Spuren treffen* 「足跡を見つける」, *auf Erdöl stoßen* 「石油を見つける」, *auf die Lösung kommen* 「答えを見つける」など「auf 前置詞句+treffen/stoßen/kommen」でも表すことができる。これは「(たまたま) …に出くわす」という「遭遇」からの転用と考えられる。

「作成」も基本的には (4b) のように他動詞構文で表すが, 作成動詞の多くは, (4b') のように「an+与格」という前置詞句を用いることで, 作成途中であることを表すことができる。ただしこれは *basteln* 「部品を組み立てて作る」, *bauen* 「いくつかの部分を組み立てて作る」, *malen* 「(絵を) 描く」, *dichten* 「詩作する」, *weben* 「(絨毯などを) 織る」, *nähen* 「縫製する」, *stricken* 「編む」などのように具体的な作業の様態を想起させる動詞に限られ, *machen*, *fertigen*, *schaffen* など「作成」のみを表し, 具体的な作業の様態に関して透明な動詞では不可能である。

5. 追及

(5a) 彼はバスを待っている。

Er wartet auf den Bus.
he wait.PRS:3SG for the.M.SG.ACC bus(M):SG.ACC

(5b) 私は彼 (が来るの) を待っていた。

Ich habe auf ihn gewartet.
I have(AUX) for he.ACC wait:PP

(5b') 私は彼 (が来るの) を待っていた。

Ich habe ihn er-wartet.
I have(AUX) he.ACC PRFX-wait:PP

(5c) 彼は財布を探している。

Er sucht sein Portemonnaie.
he look_for.PRS:3SG his:N.SG.ACC wallet(N):SG.ACC

(5c') 彼は財布を探している。

Er sucht nach seinem Portemonnaie.
he look_for.PRS:3SG PREP his:N.SG.DAT wallet(N):SG.DAT

「待つ」ことを表す基本動詞には *warten* と *erwarten* がある。*warten* は自動詞で、待つ対象は前置詞句「auf + 対格」で表す。接頭辞 *er-* の付いた *erwarten* は他動詞で、対象を対格目的語で表す。「彼が来るのを」は *sein Kommen* 「彼の到着を」と表現することもできるが、普通は *ihn* 「彼を」待つで十分表せる。(5b) (5b') からは明確な意味の違いは読み取れないが、辞書の記述を見ると「auf + 対格 *warten*」は「何もせずにいる、待つのが長く感じる」という含みがあるのに対して、「対格目的語 + *erwarten*」は「期待して待つ」という含みがあるようだ。⁶ DWDS の検索データでも *warten* と共起度の高い副詞として *stundenlang* 「何時間も」、*ewig* 「永遠に」、*monatelange* 「何か月も」、*jahrelang* 「何年も」、*wochenlang* 「何週間も」が上位に挙がり、*erwarten* では *frühestens* 「早くとも (～後に)」、*mittelfristig* 「中期的に」、*kurzfristig* 「短期間で」など「到来の時期」を表すものが上位を占めている。ここにも *warten* の「無為」と *erwarten* の「期待」の違いは見て取れる。

「探す」の *suchen* にも対象を対格目的語で表す用法 (5c) と *nach* 前置詞句で表す用法 (5c') がある。両者を比べると、*nach* 前置詞句の方は探す過程により強く焦点を合わせた表現であるという指摘があるが、⁷ 対格目的語を用いた (5c) の意味に「探す過程」が含まれないということではない。両者の対比において、「探す対象」を対格ではなく *nach* 前置詞句で表す (5c') では、終結点 (すなわち対象の発見) には至らないことが含意され、その分だけ終結点に至るまでの過程が相対的に前面に出るということである。このことは搜索過程を修飾する *verzweifelt* 「必死に」などの副詞との共起度の高さにも現れている。⁸

6. 知識 1

(6a) 彼はいろいろなことをよく知っている。

Er	weiß	viel	über	Verschiedenes.
he	know.PRS:1SG	much	about	various_things:N.SG.ACC

(6b) 私はあの人 (男性) を知っている。

Ich	kenne	den	Mann.
I	know.PRS:1SG	the.M.SG.ACC	man(M):SG.ACC

⁶ *warten* の語義記述として „nichts tun, nicht weggehen o.Ä., bis jemand kommt oder etwas eintritt“ (誰かが来るあるいは何かが起こるまで何もせず、立ち去りなどもしない (Langenscheid 2003)), や „dem Eintreffen einer Person, einer Sache, eines Ereignisses entgegensehen, wobei einem oft die Zeit besonders langsam zu vergehen scheint“ (ある人・モノ・コトの到来・出現を待ち、その時の流れが特に遅く感じられることも多い (Duden 2012)) が見られ、*erwarten* は „darauf warten, dass jemand kommt oder dass sich etwas ereignet“ (誰かが来る、あるいは何かが起こることを待つ (Langenscheid 2003)) や „dem als gewiss vorausgesetzten Eintreffen einer Person oder Sache mit einer gewissen Spannung entgegensehen“ (確実だと予想される人やモノの到着を一定の期待感を持って待つ (Duden 2012)) などが見られる。

⁷ 例えば成田 (1993:158) に「nach etwas suchen には、Starke (1970) によれば *angestrengt*, *eifrig*, *emsig* など「さがす」行為の様態を表す語句と共に用いられている例が多いということである。これは *nach etwas suchen* が「探す」という行為に焦点を合わせた表現であることの表れだと考えられる。」という叙述が見られる。

⁸ „*verzweifelt suchen* (全変化形)“ の 2 語連鎖を DWDS の 20 世紀のドイツ語標準コーパス (1 億語) で検索し、ヒットした 7 例のうち、*zu* 不定詞句と結びついた 1 例 (以下の最後の例) 以外はすべて対象が *nach* 前置詞句で表示されていた。
Verzweifelt suche ich nach einem Weg. 私は必死にすべを探す / *Rosenöl, Nelke und Storax - nach diesen drei Komponenten hatte er heute nachmittag so verzweifelt gesucht;* (香水の原料の) これら 3 つの成分を彼は今日の午後必死に探していたのだ。 / *Verzweifelt suchte sie nach dem Namen.* 彼女は必死にその名前を探した / *Wer war der Mensch, nach dem sie verzweifelt suchte?* 彼女が必死に探した人は誰だったか? / *Verzweifelt suchte er in den Gesichtern der Kameraden nach Verständnis und Hilfe.* 必死に彼は仲間たちの顔に理解と支援の表情を探した / *Verzweifelt suchte er nach Gegengründen.* 必死に彼は反対理由を探した // *Verzweifelt suche ich mich seiner zu erwehren, und es gelingt mir wirklich für den Augenblick.* 私は必死に彼から身を守ろうとする

(6b') 私はあの人 (男性) を知っている。

Mir ist der Mann bekannt.
I.DAT is the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM known(ADJ)

(6c) 彼にはドイツ語がわかる。

Er versteht Deutsch.
he understand.PRS:3SG German(N):SG.ACC

「～を知っている」「～ができる」は基本的には他動詞構文で表される。(6a) の wissen は対格目的語が必須であり、「いろいろなこと」は前置詞句で表されているが、「よく」に当たる viel が対格目的語相当と見なせる。(6b) の「私はあの人を知っている」に対しては、認識主体を与格、認識対象を主語で表す形容詞述語の用法 (6b') もある。(6c) に対しては能力主体を与格で表すような例はなさそうである。ただし、「私はそれがよくわかる」ならば Das_{NOM} ist mir_{DAT} gut verständlich. のように理解主体を与格で表す形容詞述語文も可能である。

7. 知識2

(7a) あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Wissen Sie noch, was ich gestern gesagt habe?
know.PRS:2SG you still what.ACC I yesterday say:PP have(AUX)

(7a') あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Erinnern Sie sich dar-an, was ich gestern gesagt habe?
remember.PRS:2SG you REFL.ACC there-on what.ACC I yesterday say:PP have(AUX)

(7b) 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Ich habe seine Telefonnummer vergessen.
I have(AUX) his:F.SG.ACC phone_number(F):SG.ACC forget:PP

(7b') 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Mir ist seine Telefonnummer entfallen.
I.DAT is his:F.SG.NOM phone_number(F):SG.NOM escape:PP

「覚えている」は、noch wissen 「まだ知っている」で表すなら対象は対格目的語で、再帰動詞の sich erinnern 「覚えている・思い出す」で表すなら対象は原則として an 前置詞句で表される。(7a) の was ich gestern gesagt habe (what I said yesterday) は従属文だが、wissen の対格目的語の位置を占めていると見なすことができる。(7a') の daran は後続の従属文を先取りする dar と前置詞 an の結合形である。

「忘れる」は (7b) の vergessen でも nicht mehr wissen 「もう知らない」でも対象は対格目的語になるが、(6b) に対する (6b') のように、記憶主体を与格、記憶対象を主語で表す動詞述語の用法もある (7b')。⁹ こ

⁹ sich erinnern 「思い出す・覚えている」も vergessen 「忘れる」も記憶の対象を属格で表す古風な用法もある。

これは英語の His name escapes me. 「彼の名前が思い出せない。」(グランドコンサイス英和辞典)に相当する。

8. 好悪

(8a) 母は子供たちを深く愛していた。

Die Mutter liebte ihre Kinder sehr.
the.F.SG.NOM mother(F):SG.NOM love.PST:3SG her:PL.ACC child(N):PL.ACC very_much

(8b) 私はバナナが好きだ。

Ich mag Bananen.
I like.PRS:1SG banana(F):PL.ACC

(8b') 私はバナナが好きだ。

Ich esse gern Bananen.
I eat.PRS:1SG gladly banana(F):PL.ACC

(8c) 私はあの人(男性)が嫌いだ。

Ich hasse den Mann.
I hate.PRS:1SG the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC

(8c') 私はあの人(男性)が嫌いだ。

Mir ist der Mann verhasst.
I.DAT is the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM hated(ADJ)

「愛している」の lieben (8a), 「私はバナナが好きだ」の mag (<mögen) (8b) および「好んで食べる」の gemessen (8b'), 「嫌いだ」の hassen (8c) はいずれも他動詞構文が基本となる。が、「嫌いだ」には (8c') のように感情主体を与格, 感情対象を主語とする形容詞述語文がある。

なお, アンケートの例文からやや離れるが, ドイツ語で「気に入る」「気に入らない」を表す基本表現は感情主体を与格, 感情対象を主語で表す動詞 gefallen および missfallen による構文 (8d) と (8e) である。

(8d) 私はあの人(男性)が気に入っている。

Mir gefällt der Mann.
I.DAT be_liked.PRS:3SG the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM

(8e) 私はあの人(男性)が気に入らない。

Mir missfällt der Mann.
I.DAT be_disliked.PRS:3SG the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM

9. 必要等の感情

(9a) 私は靴が欲しい。

Ich möchte neue Schuhe.
I want.PRS:1SG new: PL.ACC shoe(F):PL.ACC

(9b) 今, 彼にはお金が要る。

Er braucht jetzt Geld.
he need.PRS:3SG now money(N):SG.ACC

(9b') 今, 彼にはお金が要る。

Er bedarf jetzt des Geldes. (書き言葉)
he need.PRS:3SG now the.N.SG.GEN money(N):SG.GEN

「欲しい」「必要だ」とともに感情主体を主語とする他動詞構文が基本であるが、「必要だ」には書き言葉として(9b')のように対象を属格目的語で表す *bedürfen* という動詞もある。

10. 喜怒哀楽

(10a) (私の) 母はそのうそに怒っている。(くそが母を怒らせる)

Die Lüge ärgert meine Mutter.
the.F.SG.NOM lie(F):SG.NOM make_angry.PRS:3SG my:F.SG.ACC mother(F):SG.ACC

(10a') (私の) 母はそのうそに怒っている。

Meine Mutter ärgert sich über die Lüge.
my:F.SG.NOM mother(F):SG.NOM make_angry.PRS:3SG REFL about the.F.SG.ACC lie(F):SG.ACC

(10a'') (私の) 母はそのうそに怒っている。

Meine Mutter ist über die Lüge verärgert.
my:F.SG.NOM mother(F):SG.NOM is about the.F.SG.ACC lie(F):SG.ACC make_angry:PP

(10b) 私は犬が怖い。

Ich fürchte mich vor Hunden.
I fear.PRS:1SG REFL of dog(M):PL.DAT

(10b') 私は犬が怖い。

Es graust mir vor Hunden.
it be_terrifying.PRS:3SG I.DAT of dog(M):PL.DAT

喜怒哀楽を表す動詞には(10a)と(10a')のように、原因を主語で、感情主を対格目的語で表す他動詞表現と、感情主を主語とする再帰動詞表現の両方で用いられる動詞が多い。「怒り」を表す(10a)(10a')の他に、「喜び」(X freut mich. 「Xが私を喜ばせる」— Ich freue mich über X. 「私はXが嬉しい」)。以下用法は省略する)、「不安」ängstigen, 「憤慨」empören, 「驚き」entsetzen, erstaunen, wundern, 「退屈」langweilen などがある。

感情主を主語とする表現には(10a')などの再帰動詞表現の他に、(10a'')のような「過去分詞/形容詞+sein (be)」という表現もある。¹⁰ (10a'')の verärgert は他動詞 verärgern 「怒らせる」の過去分詞である。他に「感

¹⁰ これらの動詞の過去分詞は、辞書の見出し語としては形容詞としても記載されているものもある。

激] begeistern (X begeistert mich. 「X が私を感激させる」 — Ich bin von X begeistert. 「私は X に感激している」), 「驚き」 entsetzen, 「魅了」 faszinieren, 「失望」 enttäuschen, 「驚き」 überraschen, 「衝撃」 schockieren などが挙げられる。(10a') や (10a'') に見られるように, 感情の原因は前置詞句で表される。

「恐い」の fürchten には, (10b) のように感情主体を主語とする再帰動詞表現と, 感情主体を与格で表す非人称構文の (10b') がある。¹¹ なお, 感情主体を主語とするパターンには Ich habe Angst_{acc} vor Hunden. (<犬に対する不安を持っている) という表現もある。¹²

11. 類似関係・包含関係

(11a) 彼は父親に似ている。

Er ist seinem Vater ähnlich.
he is his:M.SG.DAT father(M):SG.DAT similar

(11a') 彼は父親に似ている。

Er ähnelt seinem Vater.
he resemble:PRS:3SG his:M.SG.DAT father(M):SG.DAT

(11b) 海水は塩分を含んでいる。

Meerwasser enthält Salz.
sea_water(N):SG.NOM contain.PRS:3SG salt(N):SG.ACC

(11b') 海水には塩分が含まれている。

I=m Meerwasser ist Salz enthalten.
in=the.N.SG.DAT sea_water(N):SG.DAT is salt(N):SG.NOM contain:PP

「類似」の基本的な表現は比較の対象を与格で表す形容詞述語文であるが (11a), 動詞述語文もある (11a')。また「包含関係」は含まれるものを対格で表すパターン (11b) と, 含む方のものを主語として, 同じ動詞の過去分詞と sein の組み合わせで表すパターン (11b') がある。

¹¹ 「怒り」の (10a) ärgern とは異なり, 「恐怖」の (10b) fürchten には, 再帰動詞表現に対応する他動詞表現 (「X が私を怖がらせる」という意味の X fürchtet mich.) はない。fürchten には感情主を主語とする他動詞表現もあるが, Ich fürchte die Armut/den Tod/den Feind/die Polizei. 「私は貧困/死/敵/警察を恐れる」のような危惧・懸念などを表す。尤も fürchten に限らず「恐怖・不安」を広く見ると, 上述の ängstigen のように, 原因を主語とし感情主を対格とする他動詞表現 Die Zukunft ängstigt mich. と, 感情主を主語とする再帰動詞表現 Ich ängstige mich vor der Zukunft. (意味はどちらも「私は将来のことが不安だ」) の両用法で用いられる動詞もある。

¹² 三宅 (2008) はドイツ語感情動詞の諸構文を概観しており, 本稿で取り上げた表現も含めて, 以下の 7 パターンを挙げている。(1) Das_{NOM} freut mich_{ACC}. 私はそのことに喜ぶ。(2) Das_{NOM} gefällt mir_{DAT}. それは私の気に入る。(3) Mich_{ACC}/Mir_{DAT} ekelt vor dem Essen. 私はその食べ物に吐き気がする。(非人称構文) (4) Ich_{NOM} liebe Sushi_{ACC}. 私はお寿司が大好きだ。(5) Ich_{NOM} erschrak vor einem großen Hund. 私は大きな犬にびっくりした。(6) Ich_{NOM} wundere mich darüber. 私はそれをいぶかしく思う。(7) Ich_{NOM} bin darüber entsetzt. 私はそのことに驚いている。(1)から(3)は感情主を斜格で表すパターン, (4)から(7)は感情主を主語とするパターンである。

12. 変化の関係

(12a) 私の弟は医者だ。

Mein Bruder ist Arzt.
my:M.SG.NOM brother(M):SG.NOM is doctor(M):SG.NOM

(12b) 私の弟は医者になった。

Mein Bruder ist Arzt geworden.
my:M.SG.NOM brother(M):SG.NOM is(AUX) doctor(M):SG.NOM become:PP

(12c) 水が氷になった。

Das Wasser ist zu Eis geworden.
the.N.SG.NOM water(N):SG.NOM is(AUX) to ice(N):SG.DAT become:PP

(12c') 水が氷になった。

Aus dem Wasser ist Eis geworden.
from the.N.SG.DAT water(N):SG.DAT is(AUX) ice(N):SG.NOM emerge:PP

(12d) グラスが割れて粉々に (<千の破片に) になった。

Das Glas zersprang in tausend Scherben.
the.N.SG.NOM glas(N):SG.NOM shatter.PST:3SG into thousand piece(F):PL.ACC

「医者」を主格で表すコピュラ文 (12a) 「私の弟は医者だ」と同様に「私の弟は医者になる」の「医者」も主格で表される (12b)。ただし「XがYになる」でもXからYへの質的・形状的な変化を表す場合は (12c) や (12d) のようにYが前置詞句で表されることがある。さらに (12c') 「水から氷が生じる」のように変化の結果の「氷」を主語にする表現も可能である。

13. 能力

(13a) 彼は車の運転ができる。

Er kann Auto fahren.
he can.PRS:3SG car(N):SG.ACC drive:INF

(13b) 彼は泳げる。

Er kann schwimmen.
he can.PRS:3SG swim:INF

「車の運転ができる」も「泳げる」も動作主体を主語として可能を表す助動詞 kann (<können) と不定詞を組み合わせる表現する。

14. 上手・下手

(14a) 彼は話をするのが上手だ。

Er kann gut reden.
he can.PRS:3SG well talk:INF

(14b) 彼はそんなに早く走れない。

Er kann nicht so schnell laufen.
he can.PRS:3SG not so fast run:INF

「～するのが上手だ」は「上手に～する」のように表すのが一般的である (14a)。この *gut* は品詞は形容詞だが、そのまま副詞と同様に用いられる。(14b)「そんなに早く走れない」の *schnell* も品詞は形容詞である。

「上手・下手」とは少し異なるが、「～するのは楽だ」「～するのは苦勞する」は行為を主語、行為主体 (楽・苦勞を感じる人) を与格で表す構文が一般的に用いられる。例文は以下の通りである。Mathematik_{NOM} fällt mir_{DAT} leicht. 「私は楽に数学ができる。」 (<数学は私には簡単だ。), Mathematik_{NOM} fällt mir_{DAT} schwer. 「私は数学に苦勞している。」 (<数学は私には難しい。)

15. 移動

(15a) 彼は学校に着いた。

Er ist in die Schule gekommen.
he is(AUX) into the.F.SG.ACC school(F):SG.ACC come:PP

(15a') 彼は学校に着いた。

Er hat die Schule erreicht.
he has(AUX) the.F.SG.ACC school(F):SG.ACC reach:PP

(15b) 彼は道を渡った／横切った。

Er ist über die Straße gegangen.
he is(AUX) across the.F.SG.ACC street(F):SG.ACC walk:PP

(15b') 彼は道を渡った／横切った。

Er hat die Straße über-quert.
he has(AUX) the.F.SG.ACC street(F):SG.ACC across-cross:PP

(15c) 彼はあの道を通って行った。

Er ging durch den Weg.
he go.PST:3SG through the.M.SG.ACC way(M):SG.ACC

(15c') 彼はあの道を通って行った。

Er ging den Weg (lang).
he go.PST:3SG the.M.SG.ACC way(M):SG.ACC (along)

「移動」は基本的に自動詞表現で、「到着」「横断」「経由」の空間関係は前置詞句で表すのが基本だが (15a) (15b) (15c), それぞれに対して空間関係を対格で表す表現も存在する (15a') (15b') (15c')。

16. 生理的欲求

(16a) 彼はお腹を空かしている。

Er hat Hunger.
he has hunger(M):SG.ACC

(16a') 彼はお腹を空かしている。

Es hungert ihn. (古風)
it make_hungry.PRS:3SG he.ACC

(16b) 彼は喉が渇いている。

Er hat Durst.
he has thirst(M):SG.ACC

(16b') 彼は喉が渇いている。

Es dürstet ihn. (古風)
it make_thirsty.PRS:3SG he.ACC

「お腹がすく」「喉が渇く」とともに「空腹を持つ」「渇きを持つ」というように他動詞構造で表す (16a) (16b)。古風な表現としては欲求の主体を対格で表す非人称構文もある (16a') (16b')。

17. 寒暖等の感覚

(17a) 私は寒い。

Mir ist kalt.
I.DAT is cold

(17a') 私は寒い。

Ich empfinde Kälte.
I feel.PRS:1SG cold(F):SG.ACC

(17b) 今日は寒い。

Heute ist es kalt.
today is it cold

「寒い」「暑い」などは形容詞+sein (be)で表す。「私は寒い」では感覚主体は与格で表され、主語は現れない (17a)。「今日は寒い」の場合は非人称主語 es が現れる (17b)。頻度は低いですが、「私は寒い」は感覚主体を

主語、「感覚」を対格として (17a') (=私は寒さを感じる) のように表現することもできる。¹³

18. 社会行為

(18a) 私は彼を手伝った／助けた。

Ich habe ihm geholfen.
I have(AUX) he.DAT help:PP

(18a') 私は彼を助けた。

Ich habe ihn gerettet.
I have(AUX) he.ACC save:PP

(18b) 私は彼がスーツケースを運ぶのを手伝った。

Ich habe ihm den Koffer tragen geholfen.
I have(AUX) he.DAT the.M.SG.ACC suitcase(M):SG.ACC carry:INF help:PP

広義の「助ける」を表す動詞には *helfen* 「手伝う」、*retten* 「助ける＝救う」、*unterstützen* 「助ける＝支える」などがあり、*helfen* では「相手」は与格 (18a), *retten* (18a') および *unterstützen* では「相手」は対格で表す。「X が～するのを助ける／手伝う」は *helfen* と不定詞句 *den Koffer tragen* 「そのスーツケースを運ぶ」を組み合わせて表すことができる。

19. 言語行動

(19a) 私はその理由を彼に訊いた。

Ich habe ihn nach dem Grund gefragt.
I have(AUX) he.ACC about the.M.SG.DAT reason(M):SG.DAT ask:PP

(19a') 私はその理由を彼に訊いた。

Ich habe mich bei ihm nach dem Grund erkundigt.
I have(AUX) REFL with he.DAT about the.M.SG.DAT reason(M):SG.DAT ask:PP

(19b) 私はそのことを彼に話した。

Ich habe ihm das gesagt/erzählt/mitgeteilt.
I have(AUX) he.DAT that.M.SG.ACC say:PP/tell:PP/ tell:PP

(19b') 私はそのことを彼に話した。

Ich habe ihn dar-über informiert/unterrichtet.
I have(AUX) he.ACC there-on inform:PP/ notify:PP

¹³ 例えば, Allmählich kehrten auch die anderen Gefühlssensoren in meinem Körper zurück und ich empfand Kälte – obwohl man mich bis zu den Schultern zugedeckt hatte. 「徐々に私の体の他の感覚器官もよみがえってきて私は寒さを感じた – 肩まで (毛布で) 覆われていたのだが。」 (<https://www.kostenlosonlinelesen.net/kostenlose-magie-des-mondes-vollmond>, 2021年2月28日アクセス)

「訊く＝問う」の最も基本的な動詞 *fragen* は「相手」を対格, 「問の内容」を *nach* 前置詞句で表す (19a)。他に再帰動詞 *sich_{REFL} erkundigen* などもあり, 「問の内容」を *nach* 前置詞句で表すのは *fragen* と同じだが, 「相手」は前置詞句 *bei ihm* 「彼のもとで」で表す (19a')。

「彼にそのことを話す」は「相手」を与格, 「内容」を対格にする表現が基本的だが (19b), 「相手」を対格, 「内容」を *über* 前置詞句で表す表現もかなり見られる (19b')。

20. 相互行為

(20a) 私はその男に会った。

Ich habe den Mann gesehen/getroffen.
I have(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC see:PP/meet:PP

(20a') 私はその男に会った。

Ich habe mich mit dem Mann getroffen.
I have(AUX) REFL with the.M.SG.DAT man(M):SG.DAT meet:PP

(20a'') 私は彼に会った。

Ich bin dem Mann begegnet.
I am(AUX) the.M.SG.DAT man(M):SG.DAT come_across:PP

(20a''') 私は彼に会った。

Mir ist der Mann begegnet.
I.DAT is(AUX) the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM come_across:PP

「Xに会う」にはいくつかのパターンがある。他動詞 *sehen* / *treffen* を用いて「相手」を対格目的語にする (20a), 再帰動詞 *sich_{REFL} treffen* を用いて「相手」を *mit* 前置詞句にする (20a'), 自動詞 *begegnen* を用いて「相手」を与格にする構文 (20a''), さらに同じ *begegnen* を用いて, 「相手」を主語にする(20a''')である。他動詞 *sehen* / *treffen* は約束して会う場合でも偶然会う場合でも用いられるが, 再帰動詞 *sich_{REFL} treffen* は約束して会う場合に限られる。また与格+*begegnen* は偶然会うことを表す。

以上概観したように語研論集第19号の特集テーマ「他動詞」のアンケート例文に関しては, ドイツ語ではほぼすべてに関して「主格主語－対格目的語」という格枠の表現が存在する。この格枠が欠けているのは(11a)の「類似関係」の表現, (12)の「変化の表現」だけである。なお, ドイツ語文法では過去分詞+*werden* (*become*) で作る受動文の主語に転換できる対格名詞句のみを対格目的語とし, この狭義の対格目的語を取る動詞のみを他動詞と見なす考え方もある (Brinkmann ²1971: 202f., Helbig/Buscha ¹⁷1996:546)。この考え方で見るならば本稿で挙げた対格名詞句を取る動詞でも, 例えば「知っている」の *wissen* (6a)と *kennen* (6b), 「怒らせる」の *ärgern* (10a), 「含む」の *enthalten* (11b), 「持っている」の *haben* (16a)(16b), また「車を運転する」の *Auto fahren* (13a)における *fahren* などは他動詞とは見なされないことになるが, 本稿ではこのような動詞を用いた文も含めて「主格主語－対格目的語」という格枠で実現したものと見なしてデータを整理したことを付記しておく。

略語一覧

1	first person	F	feminine	PREP	preposition
2	second person	GEN	genitive	PREFIX	prefix
3	third person	INF	infinitive	PRS	present
ACC	accusative	M	masculine	PST	past
ADJ	adjective	N	neuter	REFL	reflexive pronoun
AUX	auxiliary	NOM	nominative	SG	singular
COMP	complementizer	PL	plural		
DAT	dative	PP	past participle		

参考文献

- 風間 伸次郎 (2014) 「企画：特集「他動性」まえがき」東京外国語大学『語学研究所論集』第19号, 33-59.
- 成田 節 (1993) 「ドイツ語の4格目的語の一特性について -日本語のヲ格補語と比較して-」『富山大学教養部紀要』第25巻2号 (人文・社会科学編), 153-168.
- 三宅洋子 (2008) 「ドイツ語の感情動詞における格枠組みの文意味機能について」三瓶裕文／成田節 (編) 『ドイツ語を考える. ことばについての小論集』2008, 三修社, 92-99.
- Brinkmann, Hennig (?1971): *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung*. Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (¹⁷1996): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig/Berlin: Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie.
- Vater, Heinz (1976): Wie-Sätze. In Braunmüller, Kurt / Kürschner, Wilfried (Hgg.): *Akten des 10. Linguistischen Kolloquiums Tübingen 1975. Band 1*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 209-222.

辞書

- Langenscheidt: *Langenscheidts e-Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache 4.0* (2003), Langenscheidt KG Berlin und München.
- Duden: *Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, 4. Aufl. Mannheim 2012 [CD-ROM]

執筆者連絡先 : narita@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021年1月11日